

鶺鴒の歌の成立について

——「鶺鴒と霜」の歌を中心に——

喬 鉦 丹

はじめに

だいしらず

中納言家持

かささぎの渡せる橋におく霜の 白きを見れば夜ぞ更けにける

(新古今集・卷六・冬歌・六二〇)

この歌は、『新古今集』および『百人一首』に収録されることによつて広く知られるに至つた。しかし、「鶺鴒の橋」という語は本来、七夕に関連する秋の歌語として用いられるのが通例であり、霜とともに詠む例は通常の季節的文脈からはやや異質である。この点から、「鶺鴒と霜」の組み合わせがいかなる表現史の展開から成立したのかは自明ではない。そこで本稿は、「鶺鴒」を詠み込んだ『新古今集』前までの歌を全体的に把握し、その表現上の展開を整理したうえで、「鶺鴒と霜」を組み合わせて詠む歌の位置づけを検討する必要がある。

従来の研究は、当該歌に対する注釈や解釈が盛んな一方、和歌史

的な視点からその成り立ちを論じたものは極めて少ない。その中で「鶺鴒と霜」を一類型として初めて検討したのが蔵中スミの研究²⁾である。蔵中は「鶺鴒」の歌を「月と鶺鴒」と「鶺鴒の橋と七夕」の二類型に分け、それぞれの和歌と影響を与えた漢詩文を取り上げ、和歌史における「鶺鴒」および「鶺鴒の橋」の受容過程を論じた。その中で「鶺鴒と霜」を以上の両類型の交錯から生じた一類型と位置づけている。ただし後節で詳しく述べるように、各歌の成立年代を十分に検討せず、時代的に隔たりの大きい作例を同一群に収めたため、成立過程に関する議論には年代的な無理が残る。

もう一つ、同様の課題に取り込んだ研究として田中幹子の論³⁾がある。田中は蔵中の分類を踏まえて、平安時代の「鶺鴒」の歌を中心に論じ、「鶺鴒と霜」にも触れているが、関心の主眼は平安時代における七夕主題の愛好や表現傾向にあり、初期に成立したとみられる作例の一部には言及していない。

このように先行研究では、伝家持歌の表現や主題に関する考察は

多いものの、「鵲と霜」を組み合わせた歌の成立過程を体系的に検討した論は見られない。そこで本稿は、冒頭の伝家持歌を端緒とし、「鵲と霜」を組み合わせて詠む歌の成立過程を明らかにすることを目的とする。

一

「鵲と霜」の組み合わせを検討するに先立ち、まずは「鵲」歌の起源的な用例を確認しておく必要がある。

『新古今集』が成立する以前の用例を通覧すると、比較的早い時代に作られた二類型として、破鏡説話⁽⁴⁾の影響を背景とする歌が三首見られる。

風月部 鵲飛山月曙

①鵲の峰飛び越えて鳴きゆけばみやま隠るる月かとぞ見る

(千里集・七三)

②鵲の峰飛びこえてなきゆけば夏の夜渡る月ぞかくるる

(新撰万葉集・夏・二八九)

かぜのふく

③かささぎの峰飛びわけてとびゆけばみやま隠るる月かとぞ見る

(赤人集・九二)

蔵中⁽⁵⁾は、和歌における漢詩文の影響を受けて成立した「鵲と月」

の類型として①を取り上げた。これをさらに詳しく検討した田中⁽⁶⁾は、

①②③の三首はいずれも「破鏡」説話に基づく歌であると指摘している。田中の論によると、①は飛んでいる鵲を月と見立てている。

この見立ては『玉台新詠』に収める「古絶句四首」の「破鏡飛上天」を直接の典拠としている。そして「古絶句」のこの表現は、「破鏡」説話の影響を受けたものであったという。②も『新撰万葉集』で月の漢訳が「鵲鏡」であることから、「破鏡」説話に基づく歌として、当時は理解されていたと指摘した。③は島田良二⁽⁷⁾の研究によると、

『赤人集』の西本願寺本系統のA歌群のみにあり、そのA歌群は『千里集』の歌がほとんどを占めているという。それを踏まえて③と①の歌を比較してみると、一、四、五句は完全に一致し、二句「飛び越えて・飛び分けて」、三句「鳴きゆけば・とびゆけば」に語句の差異が見られるものの、いずれも描写の方向性を大きく変えるものではないことから、①に由来する異文である可能性が高い。ゆえに、その本文の成立は①より遅い。

①を収めた『千里集』には寛平六(八九四)年の自序があり、その頃の成立である⁽⁸⁾とされる。したがって①は遅くともその頃に成立した歌であろう。②が収められている『新撰万葉集』下巻には延喜一三(九一三)年八月二一日の序が添えられていること⁽⁹⁾から、②の形が成立したのはこの頃であったと推定される。

一方で、同じ時代範囲では、「鵲」に関する和歌の多くが秋部に分類され、特に七夕の日やその前後に詠まれた歌が大半を占めていることがわかる⁽¹⁰⁾。

この中で、明確に七夕伝説を背景とした「鵲」の歌は、『伊勢集』に収められた「こころのみくもゐのほどにかよひつつこひこそまされかささぎのはし」である。ただし、この『伊勢集』の歌の確実な作歌時期を特定することは難しい。高野晴代は『伊勢集』の構成について、全体を五つの部分に分けて各部の歌の成立事情を検討しており、当該の四二三番歌が属する第四部について、以下のように述べている。

詞書がなく歌枕を詠み込んだ歌が多いこの歌群は、(略)『万葉集』の異伝歌も多く、それらの歌には序詞の使用も目立つ。時代が伊勢より下がるものもあり、源重之の詠(三三三番歌)も存する。伊勢の詠とは断定できない、というより伊勢詠ではない歌集の混入部分である。

このように、当該歌の実際の作歌時期は不明確で、『伊勢集』本来の成立時期と必ずしも一致するとは限らない。

『伊勢集』に続いて比較的早く成立したと見られるのが、「かくしつゝあるべきものかかさ、きのわたせるはしもへだ、らなくに」という忠岑の歌である。この歌は『忠岑集』に収められている。同集は大きく分けて以下の四系統が存在する。¹²⁾

- 第一類本 (正保版本) 系統 六〇首
- 第二類本 (西本願寺本) 系統 一二六首
- 第三類本 (書陵部A本) 系統 一五二首
- 第四類本 (書陵部B本) 系統 一八五

当該歌は第一類本を除く三系統に共通して収録されている。安藤太郎¹³⁾は、当該歌を含むこの第二・三・四類本が共通する一群を「原忠岑集」と呼び、その起源の古さを指摘する。島田¹⁴⁾はこれを肯定し、詞書の特徴などから忠岑自撰あるいは息子の忠見編集の可能性を示唆するが、他の歌人による歌の混入も否定できず、忠岑本人との直接的な関係を明確に示すのは困難であると指摘している。したがって、当該歌の成立についても、『伊勢集』の歌と同様に、作歌時期を断定できない。

この二首に続いて、初出年代が比較的早いのは「天川水たえせん鵲の橋をししらずただわたりなん」で、『貫之集』のみに存在する。この歌を収めた系統の『貫之集』は島田¹⁵⁾によると、貫之自撰本を元にして、整然たる構成となっているという。田中喜美春¹⁶⁾も、その本文について、貫之自身が遺した資料に基づくものであり、成立事情に関しては信頼性が高いと指摘した。そうすると、七夕伝説を基にする「鵲」の歌は貫之の生存時期に遡れる。加藤幸一¹⁷⁾によると貫之の正確な生没年は不明であるが、貞観一〇(八六八)年頃から天慶九(九四六)年頃の間とする説が妥当と考えられる。

要するに、「鵲」を題材とする和歌のうち、最も早く登場するものは「破鏡説話」と「七夕伝説」の二つの系統がある。さらに両者はいずれも九世紀末から十世紀の初め頃に成立したと思われる歌がある。

これに対して、「鵲と霜」を組み合わせて詠む歌は次節で具体的に

に示すが、二類型（「月と鵲」と「鵲の橋と七夕」）の歌が成立した時期には確認できず、いずれも十世紀後半に成立した歌集に初出が見られる。この点からすると、蔵中の指摘するように、上述の二類型の表現が混同・分化する過程のなかで「鵲と霜」の歌が成立したと考えられる。

二

「鵲と霜」の歌を収める歌集の大部分は十世紀後半に成立したものである。しかし、歌自体には異本を有するものもあり、また詠作年次が収録歌集の成立年代と一致しない場合も少なくない。そのため本節は、まず事実確認としての最低限の年代的成立を明らかにしたい。

④かさゝぎのはねに霜ふりさむきよをひとりぞぬぬる君をまぢか
ね
(人麿集・三八一)

⑤かささぎの渡せるはしの霜の上を夜半にふみわけことさらにこ
そ
(大和物語・一二五段)

かささぎ
⑥よやさむきころもやうすきかささぎのゆきあひのはしに霜やお
くらん
(古今六帖・四四八九)

⑦かささぎの渡せる橋におく霜の白きを見れば夜ぞ更けにける

(家持集・二六二)
十月はて

⑧かささぎのちがふるはしのまどほにてへだつるなかにしもやぶ
るらん
(好忠集・三〇八)

十二月をはり

⑨かささぎのゆきあはぬつまのほどさむみあかでわかれしなかせ
かなしき
(好忠集・三六三)

⑩かささぎのゆきあひのまよりもる月のかけはことにぞ霜と見え
ける
(経家卿集・二八)

⑪は④⑨の時代からかなり離れているため、まず⑩を見て、それから④⑨を一括りで検討したい。

⑩を収めた『経家卿集』は養和元（一一八一）年九月二三日から寿永二（一一八三）年正月二一日の成立である。⁽¹⁹⁾同じ時期には類似した歌がなく、当時としては単独の一首である。歌の大意は、鵲が向かい合って並んでいるその羽のすき間から、もれて差す月の光は霜のように見えたことだ、と詠む。「かささぎのゆきあひのま」という表現には、⑥と⑨の影響が見え、さらに月の光を霜に喩える趣向に、独自の創造性がきらめいている。経家は六条藤家の人物で、井上宗雄⁽²⁰⁾の研究によると、古い歌語を知っており、古歌を取り、古語を用いた歌が相当な数に及ぶ。このように、⑩は鵲のはしと霜の組み合わせを詠んだ古歌を踏まえつつ、個人的な趣向による作であり、同時代においては大きな共鳴を呼ぶことはなかったようである。

問題は④～⑨の諸歌に存する。

④の『人麿集』について、現存の諸本は、五類型、七系統に分けられる。⁽²¹⁾ そのうち、④が含まれるのは第二類本と第四類本のみである。そして成立時期としては第二類本が早い。⁽²²⁾ 『国歌大観』の「人丸集解題」⁽²³⁾によると、第二類本の一八三番まではほとんど万葉集巻十から採られており、一八四～二〇六番までは巻七から採られ、二六三～二六九番までは巻三から採られている。また、四二三～四九三番までの七一首と五二八～五五〇番までの二三首は巻十一から採られている。つまり④の三八一番は『万葉集』の歌ではなく、後に家集の成立と共に付加された歌であろう。

⑤の歌は、忠岑作としては『大和物語』一二五段に初出が確認される。当該歌は『忠岑集』には収められていないが、忠岑の作とみなすことを否定することができない。なお、『大和物語』自体は、人物の官職表記や呼称の考証から天曆五(九五―)年頃に成立した⁽²⁴⁾ため、遅くともその頃の作品だと推測できる。

⑥は『古今六帖』が初出である。久保田淳・室城秀之⁽²⁵⁾では『新古今集』の「夜やさむき衣やうすきかたそぎのゆきあひのまより霜やおくらむ」(巻第十九・神祇歌)を参考歌として挙げる。この「かささぎ」と「かたそぎ」について『奥義抄』に

此歌、歌論義と云ふものには、かささぎとはかきあやまてる也。かたそぎのゆきあはぬまよりとよむべきなり。是は住吉明神のやしろのあれたるよしをみかどに申し給ふとて御夢に見ゆる歌

也とかけり。先達のことをうたがふは心得ぬ事なれど、いかるときこゆ。これはかささぎのはしをよめるにこそ。これは書に見えたる事なり。あまの河にかささぎといふ鳥の、はねをちがへてならびつらなりて橋となることのある也。これをかささぎの橋と云ふ。

との記述があり、本文として「かささぎ」のほうが妥当だと述べる。小沢正夫⁽²⁶⁾もこの『新古今集』の本文について、「かささぎ」を「かたそぎ」とよみかえて、社殿の荒れたのを憂えた神官が、神に託して詠んだ歌と指摘する。つまり元の本文は「かささぎ」である。福田智子⁽²⁷⁾も『古今六帖』では「かささぎ」の題に収められている点から、「古今六帖」に配される時点では、少なくとも「かささぎ」が詠まれている」と主張する。『古今六帖』の成立は、詠歌年次の確認できる最も新しい歌が貞元元(九七六)年作である⁽²⁸⁾ため、⑥の作歌年代は遅くともそれ以前である。

⑦は『家持集』の二類本四系統すべてに所収されているが、『万葉集』にない。島田⁽²⁹⁾は『家持集』各系統の歌本文と『万葉集』の関係を考察し、⑦が出典不明の古歌に分類できると指摘した。こうした出典不明の和歌について島田は、『伊勢集』や『素性集』の巻末に収められた読人しらすの古歌群と同様、いずれも当時広く伝承されていた和歌であると指摘した。そしてこれらは民間で謡われていた口承の歌であり、『後撰集』の時代には、歌合の隆盛や題詠の普及に伴って古歌の知識が求められるようになったことから、文字と

して定着し、小規模な私撰集として編集されるようになったという。
⑦の作歌時期は不明であるが、鳥田の指摘を踏まえて考えると、文字に定着させ、それに注目したのは『家持集』が成立した十世紀後半である。そして同じ古歌とみなす④⑥も同じ状況である。

次に⑧は『好忠集』に属する『毎月集』にあるため、『毎月集』が成立した天禄二(九七一)、三(九七二)年頃³⁰に詠まれた歌である。⑨は同じ『毎月集』の歌であるが、本文に異同が見られる³¹。伝為相本『好忠集』の本文は、「肩背衣ゆきあえぬつまの程狭みあかで別れし人ぞ恋しき」となっている。『曾禰好忠集全釈』³²は掛詞の技法から「鵲」の本文も妥当性を有するとしつつ、為相本文の「肩背衣」は「好忠の下賤の姿にふさわしい」とする見解を示す。一方、『曾禰好忠集註解』³³は、「鵲のちがふる橋」を用いて冬の七夕を詠んだ三〇八番歌(稿者注…⑧)の存在を考慮すれば、同様の題材を詠んだ可能性を否定できない」と結論づけている。その指摘に賛成したい。⑨の「かささぎ」が伝為相本で「肩背衣」となる事例と同様に、『新古今集』も⑥の「かささぎ」が「肩背衣」になり、平安後期の愛好による改作である可能性が否定できない。神作光³⁴の研究によると、好忠は「創造的・革新的な表現を多用する歌人」であり、「牛窓(憂し)」「野洲浦(易い)」「浦々(うらうら)」「避き(斧)」「うつきはら」など、『平安和歌歌枕地名索引』において好忠独自の地名表現を多く用いているという。そして「なつぎぬの有りしなが

らも冬のよはいもとしねなばさむからんやぞ」(『好忠集』二九八)のように、夏、秋の歌によく見られる「夏衣」を冬に詠むといった季節を越えた発想を試みている。以上のことから、⑨のような歌を、好忠が詠んでいた可能性が高いと考える。

すなわち、④⑤⑨の中で作歌時期を比較的明確に定め得るのは⑧・⑨に限られる。④⑤⑦の各歌が詠まれた正確な時期は不明であるものの、十世紀後半に成立した歌集に収められている点を踏まえると、この時期において「霜と鵲」という題材が集中的に関心を集めていた可能性が高いと考えられる。特に④は、『人麿集』のみならず『古今六帖』にも人麿作として収録されており(第五・二六九八番)、こうした重複的な収録例もまた、当該題材が当時注目を集めていた証左といえる。また、現存資料に基づけば、同時代において「鵲と霜」の組み合わせを創作として積極的に用いたのは好忠に限られる。

三

成立年代を直接に論じることが困難である以上、題材の系譜的検討を通じて「鵲と霜」を詠む歌の成立過程を推測できないかということについて考慮する必要がある。

蔵中³⁵は和歌における鵲の歌を題材の組み合わせで分類し、その成り立ちを検討した。それを参照して、前節でとりあげた歌で時代が

接近しているものを整理すると以下のようになる。

- ④ … 鵲と霜
- ⑤⑦ … 鵲の橋と霜（宮中の橋）
- ⑥⑧ … 鵲の橋と霜

次に蔵中³⁶の分析によれば、中国詩に由来する二つの詩題、すなわち「月と鵲」と「鵲の橋と七夕」は、本来は独立した題材であった。

しかし『李嶠百詠』の「鵲」には、すでにその混和が早くも見られる。たとえば頷聯「饒樹覺星稀・尾聯「儻遊明鏡裏」は「鵲」と「月」を題材とし、『芸文類聚』巻四二にも収録する魏武帝の作である『短歌行』の「月明星稀、烏鵲南飛。繞樹三匝、何枝可依。（月明らかに星稀に、烏鵲南に飛ぶ。樹を繞ること三匝、何れの枝に依るべき）」を想起させる一方で、頸聯「喜遂行人至、愁隨織女歸」は天の河における二星の別離、すなわち七夕詩の題材を踏まえている。蔵中はこのような詩を起点として、和歌においても両題材が次第に混和していったと指摘した。その合流によって④の「鵲と霜」と⑥⑧の「鵲の橋と霜」の類型がそれぞれ成立したとされる。そして⑤⑦の「鵲の橋と霜（宮中の橋）」が⑥⑧の「鵲の橋と霜」から分化されたという。

ところが、各分類に含まれる歌の内容を確認すると、同一分類に属する歌の成立を一概に論ずることはできない。そこで各歌の解釈を踏まえつつ、歌の類型と関係を明らかにしたい。

蔵中は④を古い歌とし、『万葉集』の「天飛ぶや雁の翼の覆ひ羽

のいづく漏りてか霜の降りけむ」（巻第十・秋雑歌・二二三八）の「雁」を「鵲」に置き換えてみると発想に通っているところがあると論じる。この万葉歌について『万葉集全註釈』³⁷などは、雁の羽根のどこから漏れて霜が降ったのだろうかとうと解する。④も、鳥の羽と霜を組み合わせる発想を有することから、蔵中が指摘した万葉歌との関連は認められる。それに、④の「待ちかね」は、『万葉集』の以下の歌とも通じる。

待ちかねて内には入らじ白たへのわが衣手に露は置きぬとも

（第十一・寄物陳思・二六八八）

この歌の主題は④とは異なるものの、その存在は、④のように季節感を添える景物を媒介として、なかなか訪れない相手を持つ心情を詠む歌が、すでに『万葉集』において確認できるという。

つまり④における「鳥の羽と霜」および「夜の待望」の表現はいずれも『万葉集』に既に確認される詠法である。すなわち、「鵲」という語の採用を除けば、その叙景表現と心情表現はいずれも七夕伝説的な趣向よりは、『万葉集』以来の伝統的詠法に拠っている。

⑨について蔵中論では言及されなかったが、「鵲と霜」を題材とする点で④と同じ系譜に属するとみなし得る。しかし⑨の「鵲のゆきあはぬつま」は『中古歌仙集』³⁸と『好忠集註解』³⁹によると、冬には羽が交差しきらない端と解し、それを逢えぬ男女の衣の端に重ねる。すなわち七夕後の二星の別離を悲しむ冬の恋歌と解釈する。つまり⑨は、④の「鵲の羽」との発想的な共通性を保ちながら、「鵲

の橋」の系譜とも接点を持つ歌である。

両者の前後関係を考えると、④は古歌に属し、「鵲」以外の表現や主題はすでに『万葉集』にも確認される。そのため、『人麿集』に収められる以前には別の語で詠まれ、後に「鵲」として伝えられた可能性がなくもない。これに対し、⑨の発想は七夕伝説の恋物語と直接に結びついている。前節で検討したように、七夕伝説に基づき、鵲の歌は九世紀後半の一首を嚆矢とし、それ以前の例は確認できない。以上を総合すると、④は⑨よりも早い段階に成立した可能性が高いと推測される。ただし、④は「鵲」の本文として『人麿集』に伝わっているため、「鵲と霜」という形で注目されるのは、結局⑨と同じく十世紀後半頃であったと考えられる。

次は「鵲の橋と霜」の⑤⑥⑦⑧を見る。

⑤は『大和物語』一二五段で忠岑の歌とされ、泉の大将の藤原定国が酔って左大臣藤原時平の屋敷を訪れる際に、壬生忠岑が大将の供に控えて、鵲橋の歌を詠んで訪問の挨拶をする物語である⁽⁴¹⁾。諸注釈書においても歌意の理解に大きな相違はなく、かささぎの橋に置かれた霜の上を夜更けに踏み分けて、ことさらに参上した趣旨と解されている⁽⁴²⁾。この「鵲の橋」は、古くから「時平邸の御階」とする理解が有力である。堀によれば「烏鵲橋」といった固有名を宮中の御階に用いた例は見出せない。しかし田中が指摘した通り、蘇頌や白楽天の詩には実在の橋を「烏鵲橋」と名付けた用例があり、貴人の生活空間を天上世界に擬する比喩的発想は確かに存在していた。

したがって、その背後に漢籍の影響を想定することは可能である。

古橋は「鵲の橋」について、稀な訪れであること、霜のため渡行が困難であること、それにもかかわらず敢えて訪れたことといった含意が読み取れると指摘した。要するに、当該歌は「鵲の橋」という本来は男女間の愛情を代弁する歌材を、現実世界の御階に喩えなおすことで、普遍的な同性間の社交的関係に持ち込み、その上で相手に対して困難を越えてでも逢いたいという思いを、雅な趣向に託して表現したものと理解できる。七夕伝説の恋物語のものではないが、障害を越えて相手に会おうとする主観的な心情を強く表現している点において、その系譜から派生した作と理解すべきであろう。

⑥は全体として冬の叙景歌である。久保田・室城は⑥を「夜が寒いか、衣が薄いのか、鵲の行きあいの橋に霜が置いているのだから」と大意をとる。「ゆきあひの橋」は、福田によると、「隣り合わせのふたつの季節にまたがる橋」と解釈し、ここでは、「秋から冬へと季節が移り変わる時節に、鵲が羽を並べて飛ぶさまを「橋」に見立てて想像した」という。このような七夕伝説の叙景的背景から「鵲の橋」を抽出し、それを冬の景観における趣向へと転用する発想は、⑦と同じである。

⑦について現在の主要注釈書では、おおよそ「鵲が翼を連ねて渡している橋に霜が置いているのを見ると、夜が更けたことが分かる」と解釈されており、大きな解釈の差異はない。その「鵲の橋」は「宮中の御階」を指すとする説と「大空」を指すとする説が古く

から併存している。冬の御階に霜が置いている光景として理解しても不自然ではないが、『百人一首』の古注釈⁴⁹において、漢詩の影響として、「鵲の橋」が「大空」を指していることが多い。そして『新古今和歌集全注釈』⁵⁰も「中世的な冬の夜空に充ち満つ霜気を歌った」とし、それは「楓橋夜泊」などの漢詩の世界と類似するものであることを指摘している。確かに当該歌は、⑦のように主体的な心情を読み取ることができないため、専ら冬景の叙述として成立していると考ええる。

蔵中は⑤⑦を同一の系譜に属する歌とみなし、いずれも由来不明であることから、伝承の中で生き続けた作と位置づけた。その際、「鵲の橋」の語をそのまま歌の意味に即して解釈し、もともとは恋の思いを込めた歌であったと論じている。

その後、能宣の歌「くもゐなるたづとみしかどかささぎのはしのたよりにかよふなりけり」（能宣集・三三一）は、詞書（一品宮のうち）にたてまつりたまふ…）によって「鵲の橋」が恋人の通う橋ではなく、宮中にかかる橋として意識されていることがはっきり示されているという。それをきっかけに、それまで恋路の象徴とされた「鵲の橋」を初めて「宮中の橋」という意識で捉えるようになったと指摘する。

以上のことから、⑤⑦に見られる「鵲の橋と霜（宮中御階）」は、⑥・⑧における「鵲の橋と霜」から分化した表現であると蔵中は論じている。ところが、前節で確認したように⑥と⑦の成立関係は不

明であり、また⑤と⑧を比較すると、⑧はそれを入集する『毎月集』の性格によって、天禄二（九七一）、三年（九七二）頃の作と明らかにできる一方、⑤は『大和物語』の成立時期から推算して、⑧より少なくとも二十年ほど前に遡る。したがって、両者の分化過程については確実な結論を下すことはできない。むしろ、⑤は七夕伝説の恋物語から分化した作とみなし、⑥⑦は同じく冬の景観を主題とする季節歌として位置づけるのが妥当であろう。

これに対して、⑧については、『平安鎌倉私家集』⁵¹において「鵲のちがふる橋」が鵲の羽を打ち交わして成す橋とされ、「間遠にてへだつるなかに」は牽牛・織女が年に一度その橋を渡って逢うため、ふだんは相隔たっている意を表すと解す。その時間的隔たりのうちに冬が訪れる、と解釈する。したがって⑧は、七夕的趣向や恋歌的題材を全面的に取り込んだ歌である。そして⑧は⑨と同一作者による歌であり、両首は趣向も共有している。このことから、歌語として「鵲の橋」と「鵲」との相違は、好忠における漢詩文や和歌表現の混淆に由来するものと考えられ、両首は同一の類型に属する作と位置づけることができる。

ここでもう一度冬の鵲の系譜を整理したい

- a 万葉的表現に基づく④
- b 「鵲の橋」を恋情から社交へ転用する⑤
- c 冬の景観に主眼を置く⑥⑦
- d 七夕伝説の恋物語を機能させる⑧⑨

e a ~ dの十世紀後半流行の影響を受けた後世の⑩

その中で、万葉の伝統的表現に基づくaは、九世紀後半に登場する七夕伝説に由来するbcdよりも早く作られたと推測できる。bcdの相互の前後関係を明確にすることはできないが、a ~ dはいずれも、十世紀後半に成立した歌集に初出が見られることから、「鶴と霜」という類型は、その時期に集中的に注目を集めるようになってきたと考えられる。

まとめ

本稿では、和歌における「鶴」に着目し、「鶴と霜」を組み合わせ、せて詠む歌の成り立ちを検討した。破鏡説話を背景とする「鶴」の歌と、七夕伝説に基づく愛情表現としての「鶴」の歌は、作者・作成年代が比較的明確であり、寛平年間にはほぼ同時期に登場している。一方、「鶴と霜」の歌で作歌時期が判明するのは好忠の二首に限られ、それ以外の作例の成立年代は不詳である。ただし、いずれも十世紀後半成立の歌集に初出しており、この時期に集中的に注目されたことがうかがえる。本稿冒頭に掲げた伝家持歌も、その時代的文脈に位置づけられる。

ここで強調すべきは、いわゆる「冬の鶴」の歌はその後長く和歌史の表面から姿を消していったということである。そうした状況を大きく転換させたのが、『新古今集』の成立であった。⑦の歌が『新

古今集』に入集されたため、その影響が大きいように見えるが、新古今時代における「冬の鶴」への関心の初源が⑦の伝家持歌にあるとは断定できない。なぜなら定家の詠んだ「神な月時雨れてきたるかささぎのはねに霜おきさゆる夜の袖」は、「鶴のはね」を用いており、④との関連性も見られる。そして定家歌の初出が建仁元（一二〇一）年二月一六・一八両日に行われた⁽⁵²⁾『老若五十首歌合』で、『新古今集』の撰歌段階⁽⁵³⁾とほぼ同時期にあたる。この冬の鶴表現が定家の中でどのように形成されたのか、またその発想の源泉をどこに求めるべきかについては、今後の課題として興味深い。

注

(1) 『新古今集』と『百人一首』の注釈書として多くみられる。当該歌の解釈や本文整理をされる論著として、古くから吉澤義則「家持の歌として新古今集に採られた〈鶴の渡せる橋に〉の解釈に就いて」（『やまとことば』、教育図書、一九四二）や堀勝博「鶴の渡せる橋に置く霜の」―百人一首家持歌の解―（『和歌文学研究』六〇、一九九〇・四）があり、比較的近年の研究は田中裕「遠聞郭公」（和泉書院、二〇〇三）、小川靖彦「かささぎの渡せる橋―歌仙・中納言家持の誕生」（『歌の道・家持へ、家持から』高岡市民文化振興事業団高岡市万葉歴史館、二〇一四）、加藤有子「かささぎの渡せる橋に置く霜の：比較文学的立場から」（『日本文学研究』五三、二〇一四・二）、小林千草『百人一首を読む―幕末・嵯峨山人の口語訳とともに』（清文堂出版、二〇二〇）、吉海直人『百人一首を読み直す―言語遊戯に注目して―』（新典社選書、二〇二〇）、甲斐睦朗「甲斐睦朗エッセイ 大伴家持の「鶴の渡せる橋」の歌・「百人一首」に本歌が採用された経緯」（『日本語学』四〇、二〇二二・六）、小田勝『百人一首文法談義』（和

- 泉書院、二〇二二）、中川博夫・田淵句美子・渡邊裕美子『百人一首の現在』（青簡舎、二〇二二）、木村孝太『百人一首』主要伝本翻刻集成稿』（『日本大学大学院国文学専攻論集』一九、二〇二二・二二）がある。
- (2) 蔵中スミ『鶺鴒の橋―詩語から歌語へ―』（帝塚山学院短期大学研究年報 二二、一九七五・一二）
- (3) 田中幹子『鶺鴒について―平安詩歌を中心に―』（札幌大学女子短期大学紀要）二七、一九九六・三三
- (4) 昔有夫婦將別、破鏡、人執半以篤信。其妻與人通、其鏡化鶺鴒飛至夫前、其夫乃知之。後人因鑄鏡為鶺鴒背上、自此始也。（『太平御覽』卷七一七・鏡）『太平御覽』卷七一七「鏡」によれば、ある夫婦が別離に際して鏡を二つに割り、再会の証として半片ずつを持った。のちに妻が他者に通じたため、その鏡片が鶺鴒に化して夫のもとへ飛来し、不義を知らせたという。
- (5) 同注(2)
- (6) 同注(3)
- (7) 島田良二「赤人集」（『平安前期私家集の研究』、桜楓社、一九六八）
- (8) 『和歌文学大辞典』編集委員会編『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー、二〇一四年）「千里集」項（平野由紀子執筆）
- (9) 『和歌文学大辞典』編集委員会編『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー、二〇一四年）「新撰万葉集」項（山口博執筆）
- (10) 「かささぎ」という語をキーワードに、日本文学ウェブ図書館で検索したところ、計七十四首の詠例が確認された。これらの多くは私家集に収められたものであり、部立てのない場合が多い。そのなかで、部立てが明確なものとしては十七首が「秋」部に、二首が「恋」部に分類されている。また、残る五十五首のうち、詞書や配列の文脈から判断して、四十二首が秋の季節感や七夕伝説に関連する内容を有していることが確認できる。
- (11) 室城秀之・高野晴代・鈴木宏子共著『和歌文学大系18・小町集・業平集・遍昭集・素性集・伊勢集・猿丸集』（明治書院、一九九八）。
- (12) 安藤太郎『忠岑集について』（『言語と文芸』五、一九六三・五）、島田良二「忠岑集」『平安前期私家集の研究』（桜楓社、一九六八）、を参考。また、島田論に言及しなかった冷泉家時雨亭叢書の三種類の『忠岑集』については、『和歌文学大辞典』編集委員会編『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー、二〇一四年）「忠岑集」項（野呂香執筆）によると、それぞれ第一・三・四類本の系統に属することがわかる。
- (13) 同注(12)安藤太郎論に同じ。
- (14) 同注(12)島田良二論に同じ。
- (15) 島田良二「貫之集」『平安前期私家集の研究』（桜楓社、一九六八）。
- (16) 田中喜美春・平沢竜介・菊地靖彦同著『和歌文学大系19・貫之集・躬恒集・友則集・忠岑集』（明治書院、一九九七）。
- (17) 『和歌文学大辞典』編集委員会編『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー、二〇一四年）「貫之」項（加藤幸一執筆）。
- (18) 同注(2)。
- (19) 『和歌文学大辞典』編集委員会編『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー、二〇一四年）「経家卿集」項（梅田径執筆）。
- (20) 井上宗雄『鎌倉時代歌人伝の研究』（風間書房、一九九七）。
- (21) 『和歌文学大辞典』編集委員会編『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー、二〇一四年）「人麿集」項（藤田洋治執筆）。
- (22) 島田良二「赤人集」『平安前期私家集の研究』（桜楓社、一九六八）。
- (23) 片桐洋一・山崎節子『人丸集』国歌大観解題。
- (24) 阿部俊子『校本大和物語とその研究』（三省堂、一九五四）。
- (25) 久保田淳・室城秀之『和歌文学大系46・古今和歌六帖（下）』（明治書院、二〇二〇）。
- (26) 小沢正夫『袋草紙注釈 上』（塙書房、一九七四）。
- (27) 福田智子『古今和歌六帖』出典未詳歌注積稿・第六帖(21)鶺鴒水鶏』（『文化情報学』一五、二〇一九・一〇）。
- (28) 『和歌文学大辞典』編集委員会編『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー、二〇一四年）「古今和歌六帖」項（青木太朗執筆）。

(29) 島田良二「家持集」『平安前期私家集の研究』(桜楓社、一九六八)。

(30) 神作光一「曾禰好忠集の研究」(笠間書院、一九七四)。

(31) 神作光一「曾禰好忠集の校本・総索引」(笠間書院、一九七三)を参照。

(32) 神作光一・島田良二「曾禰好忠集全釈」(笠間書院、二〇一〇)。

(33) 川村晃生・金子英世「曾禰好忠集注解」(三弥井書店、二〇一一)。

(34) 神作光一「曾禰好忠集における伝統と創造―表現研究への試み―」(中古文学一三、一九七四・五)。

(35) 同注(2)。

(36) 同注(2)。

(37) 武田祐吉「万葉集全註釈・第八」(改造社、一九四九)、窪田空穂「万葉集評釈・第七卷」(東京堂、一九五〇)、沢瀉久孝「万葉集注釈・巻第十」(中央公論社、一九六二)を参考。

(38) 松本真奈美・高橋由記・竹鼻嶺「和歌文学大系54・中古歌仙集1」(明治書院、二〇〇四)。

(39) 川村晃生・金子英世「曾禰好忠集注解」(三弥井書店、二〇一一)。

(40) 人物像は古橋信孝「大和物語新釈・上巻」(臨川書店、二〇二二)を参考したが、そのことは他の注釈書にも同じく指摘しており、すでに定説になっている。人物の官職は「公卿補任」を参考。

(41) 「大和物語」一二五段本文は左のとおり。

泉の大将、故左のおほいどのにまうでたまへりけり。ほかにて酒などまあり、酔ひて、夜いたく更けてゆくりもなく物したまへり。おどろき給て、「いづくに物したまへる便りにかあらむ」などきこえ給て、御格子あげさはぐに、壬生忠岑御供にあり。御階のもとに、まつともしながらひぎまづきて、御消息申す。

「かささぎの渡せるはしの霜の上を夜半にふみわけことさらにこそとなむ宣ふ」と申す。

(42) 武田祐吉・水野駒雄「大和物語詳解」(湯川弘文社、一九六四)、森本茂「大和物語全釈」(大学堂書店、一九九三)、高橋正治「新編日本古典文学

全集12・竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語」(小学館、一九九四)、
南海博洋・岡山美樹「大和物語・上」(講談社学術文庫、二〇〇六)、古橋
信孝「大和物語新釈・上巻」(臨川書店、二〇二二)を参考。

(43) 同注(1)堀勝博論に同じ。

(44) 同注(3)。

(45) 同注(42)古橋信孝論に同じ。

(46) 同注(25)。

(47) 同注(27)。

(48) 久保田淳「新古今和歌集・上」(角川ソフィア文庫、二〇〇七)、同、「新古今和歌集全注釈」(角川学芸、二〇一一)、中川博夫・田淵句美子・渡邊裕美子「百人一首の現在」(青簡舎、二〇二二)を参考。

(49) 島津忠夫・上條彰次「百人一首古注抄」(和泉書院、一九八二)今西祐一郎・福田智子・菊地仁「百人一首注釈書叢刊14 百人一首諺解・百人一首師説秘伝」(和泉書院、一九九五)島津忠夫・幹安代「百人一首註解」(和泉書院、一九九八)を参考。

(50) 同注(48)「新古今和歌集全注釈」。

(51) 松田武夫「日本古典文学大系80・平安鎌倉私家集」(岩波書店、一九六四)。

(52) 後藤重郎「老若五十首歌合」国歌大観解題。

(53) 後藤重郎・杉戸千洋「新古今和歌集」国歌大観解題によると、撰集下命後、撰者等による選歌は建仁元年一月三日〜建仁三年四月二〇日頃である。